

バロック絵画・その近代性の秘密
-カラヴァッジョ・ドメニキーノ・ベラスケス絵画の共通項-
真鍋友範
2018

バロック絵画は、その劇場的な建築空間を飾る一要素として彫刻や建築とともに17世紀のバロック空間を構成してきました。

多くは宗教建築の一部としての当時の環境芸術の一翼を担っていたと言えるでしょう。

今回は、そのバロック絵画にスポットを当て、内に秘められた近代性とは何であったかを明らかにしたいと願っています。

その例示として、イタリア初期バロック美術でおなじみのカラヴァッジョとドメニキーノの作品、スペインバロック全盛期の画家ベラスケスの3作品を取り上げます。

さらにその絵画に秘められた近代性を一作品ごとに明らかにしていく無いようです。

そこから読み取れる近代性こそバロック絵画の魅力であったことが、最後に読者の方々に理解されれば幸いです。

~~~~~

カラヴァッジョという名前の17世紀バロック画家をご存知でしょうか。イタリア紙幣がかつてリラという単位の紙幣であった時代、最高額の紙幣に肖像画として取り上げられたほど現地では有名な画家です。日本では、2016年に2回目の大規模なカラヴァッジョ展が上野の国立西洋美術館で開催されましたので、記憶されている方もいらっしゃると思います。

このカラヴァッジョという画家ですが、これまで日本ではあまり馴染みがありませんでした。

なぜなら、高校時代に芸術選択で美術を取り、その一部で美術史を学んでも、バロックを代表する画家として教科書で例示されるのは、レンブラントやフェルメールが主で、滅多にクローズアップされることもない画家です。

しかし、この画家はもっともっと日本で知られるべき、バロック絵画を切り開いた革新的な描画表現能力を備えた画家といえる人物なのです。

まず、ここで取り上げる作品は、カラヴァッジョの出世作であった作品《聖マタイの召命》です。(写真1)



写真1

この場面は、イエスが弟子のパウロとともに収税所に現れ、収税人であるマタイにむかって、イエスが弟子になるよう呼び出している場面です。

でも画面の中の登場人物の仕草に視線を集中してよく見て下さい。いったい誰が呼び出されているか判りますか。多分、人様々な回答がかえってきそうです。

貴方にその答えを教えましょう。

それは画面左端でテーブルに寄りかかっている眼鏡の人物です。あなたはきっと驚いたでしょう。でも何故なのでしょう。

この絵画には、カラヴァッジョが企てた驚くべき秘密が隠されているのです。この絵画を鑑賞するあなたは、図らずもカラヴァッジョから出題されたクイズである、マタイ探しへの挑戦を受ける事になるのです。

この問題への正解の発見には、私の知る限り400年以上かかっています。

正解を解き明かす説明に移る前に、あなたには、これまで語られてきた様々な誤解説を先に紹介しましょう。

まず、もっとも多いのは、中央の帽子をかぶった髭の男がマタイであるという答えです。イタリアカトリック教会は、この説を主張しています。ですから、

2017年現在において、あなたが仮に団体旅行でローマを訪れた時、現地ガイドの説明を聞くと、マタイは中央の髭の男だと解説を受けるはずですが、そしてその根拠とする見解とは、イエスの指差すポーズが不明確なので、髭の男が自分を指差しながら、『呼び出しているのは私ですか』とイエスに問い返している場面という解説なのです。

もう一つの説はドイツで1980年代に提起された説明で、マタイは画面右端で俯いた若者の収税人であるという答えです。つまり、イエスの呼び出しの動作は中央の髭の男の指差す動作を介在して右端の俯いた若者に伝わり、若者の心には内面的な宗教感化が起こり、その呼び出しに呼応するという説です。

イエスは力なく指差していると表現されている例もありますが、聖書を根拠とするなら、イエスは誰がマタイなのかを収税所の窓越しに確認してからこの場に現れたのです。従って指差すのならしっかり指を伸ばして指差している表現でなければ納得出来ません。さらには、この説の信奉者は、西洋絵画には中途半端な指差しポーズもあり不思議ではないと主張されます。

髭の男の指差しの方向を無理矢理斜め前の俯いた若者と納得させようとしています。指先は隣の眼鏡の老人に向けられています。

さらに最近\*、実はカラヴァッジョは誰がマタイであるかを見る人の判断に任せた、という珍説まで飛び出してしまいう状況です。誰がマタイでもかまわない、という内容の絵画をカラヴァッジョが描いたというのです。

一般に、人はその道の専門家から語られる説明を鵜呑みに仕勝ちです。でも、貴方の目で見て、あなたの頭で納得できる答えを考えてはいかがでしょうか。

では、読者のあなただけにはシンプルに正解をお伝えしましょう。

この場面で呼び出されている《マタイは画面左隅でテーブルに寄りかかって若い収税人の作業を見守っている眼鏡の収税人》なのです。

その判定は、絵画の登場人物の動作を冷静に読み解くという、合理的判断であなたにも実現できるものです。

まず、髭の男の質問動作は何故生じたのでしょうか。その動作は、イエスからの曖昧な視線が無ければ発現しません。曖昧だからこそ彼は質問したのです。つまりイエスからの視線が最初から俯いた若者に向けられていれば、髭の男からは着座位置が離れているので、誰を呼んでいるのかはすぐに判ったはずですが。

髭の男の左手の動作が意味することは、よく観察しないと判明しません。この場合、単に誰かを指差すという単純な動作ではなく、二段階動作なのです。

つまり『探しているのは私ですか、それとも、隣の人ですか』という意味の連続動作なのです。ヒントは力強く力を込めて立てられた親指の状態です。

聞かれたイエスは、当然の事として、髭の男からの質問を受けましょう、という意思表示を、右手の手のひらを開いて行います。さらに右足を横に一步踏み出します。何故でしょう。人の動作には必ず理由がありますから、意味のない動作など行わないのが普通ですね。イエスには横に移動しなければならない理由がありました。元の立ち位置からは、奥に座っている眼鏡の男の顔がよく見えなかったのです。立ち位置の移動で相手の顔がよく見えるようになります。

よく見かけるこの身体動作の誤った説明はこうです。もう帰ろうとしているとか、テーブルに向かって歩き出しているとかですが、まだ呼び出しが完了していないのに帰る筈がないし、歩き出したらすぐ隣の使徒ペテロにぶつかってしまいます。これは、マタイの顔が見える位置に一步だけ横に踏み出した（視点を移動した）情景なのです。

さらにイエスは次の動作に移ります。右手を上から廻しながら、向こう側の人と呼ぶ動作を行います。注意深く見なければならないのは、力の籠っていない手首と指先の状態です。決して指差し動作ではないのです。この場面でイエスに求められた動作は、探しているのが、髭の男自身なのか、あるいは隣の机に寄りかかった眼鏡の収税人であるのかの選択です。判断しづらい微妙な両者の位置関係から、イエスは指差すという動作はとらず、向こう側の人というメッセージを発しているのです。そうです、呼び出されるのは眼鏡の収税人の男なのです。

この絵画に描かれているのは、中央の髭男の二段階の質問動作の軌跡と、それに答えながらマタイの召命を行うイエスの三段階の回答動作の軌跡なのです。

マタイは彼ら二名の動作の残像を残したポーズを描いたので、複雑なポーズになっているのです。つまりイエスは意味もないのに複雑なポーズを取っていないのです。

カラヴァッジョが絵画に描き込んだ内容は、ストーリーの軌跡であって、身体動作の軌跡です。静止画でありながら、スナップ写真ではなく連続するストーリー動画なのです。

もう一つの特徴は、カラヴァッジョの仕掛けた謎解きゲームです。

誰もが、誰がマタイなか必死に見て探さなければ判らないような内容を描き込む事で、興味の尽きない作品の魅力を高めています。

まとめますと、17世紀のバロック初頭において、カラヴァッジョが静止画たる絵画世界において表現したかった内容は、真に現代で言うところの映画のような、あるいはアニメのような世界です。見る人の心の中で登場人物が連続して動態イメージをベースとした視覚世界の再現だったのです。

またカラヴァッジョは、絵画の中にマタイ探しというゲーム性を取り込むという絵画の楽しみ方の新境地も開拓しました。

さて、次に挙げるのは、17世紀イタリアバロック期ボローニャ派の画家ドメニキーノの描いた《狩りをするディアナ》です。別名《ディアナの水浴》という作品です。(写真2) 主役はあくまで歓喜するディアナであり、よく目立つ中央の水浴する女性？はニンフです。



この作品はその所有経歴もユニークです。ある枢機卿がこの絵画を注文したのですが、ボルゲーゼ枢機卿が欲しくなってしまう、無理矢理な荒手で横取りした作品です。この経緯から現在でもローマにあるボルゲーゼ美術館で作品に対面できます。

さて、ボルゲーゼ卿がどうしても欲しくなった理由は何だったのでしょうか。それはこの作品をよく観察すれば見えてきます。

画面の中でまず目を引くのは従者達が狩りのために弓を引く場面です。その従者達の弓を引く動作は段階別になっていて、一連の連続する動作をイメージさせる者になっています。矢は見事に空飛ぶ鳥を射抜き、ディアナは歓声をあげています。一方で猟犬は右隅の灌木に隠れている男を発見して吠えたてはじめます。水浴しているニンフは視線をこちらに向けています。灌木に隠れてい

る男は獵犬に見つかっていますから、恐らく次の段階では殺されてしまうでしょう。同時に水浴するニンフの姿を見ている時空を超えてこの絵画を見ている貴方も、このストーリーの参加者に取り込まれます。その運命は灌木の中に隠れている男と同じでしょう。

この絵画の面白さは、まさに動画であることと、見る人を取り込む視線のトリックなのです。

ルネッサンスの絵画に比べると遥かにダイナミックであり、ギリシャ神話の物語でありながらも俗世間っぽく、総じて近代的な感性あふれる絵画です。

先ほどの《聖マタイの召命》との共通点は、ここでも《動画イメージの再現》にあります。

また、時空を超越して、鑑賞者を絵画の中に取り込んでしまうマジック性などには本当に驚かされる、実にテクニシャンともいえる画家なのです。

さて3点目に取り上げる絵画は、スペインバロック絵画の巨匠ベラスケス《侍従達》です。王女マルガリータが侍従達に取り囲まれ衣装を着せられています。その様子を見ている国王夫妻の視点で描かれた絵画として、また鏡を利用した凝った空間構成が魅力とされる絵画です。(写真3)



しかし、この絵画では決して見落とすことの許されない、この絵画の近代性を如実に示す内容が描き込まれている点に注目しなければなりません。

それは、大型犬めざして画面右外側から駆け込んで登場し、まさにその背中を蹴っている画面前面の少女（少年？）の瞬間描写なのです。

絵画中でこの場面だけは静止中あるいは動きの少ない場面ではなく、正に動作進行中の動画場面なのです。

さて、創造力豊かな皆さんはこの瞬間の直後にどのような物語（ストーリー）が展開するとお考えでしょうか。

恐らく驚いた大型犬は少女（少年）に向かって数回は吠え立てるのではないのでしょうか。驚いた周囲の人たちの驚愕の表情が想像できるのでしょうか。この場面で引き起こされる混乱の光景こそ、ベラスケスの構想したこの絵画の仕掛けられたストーリーなのです。

つまり、この絵画はこの場面だけで収束する内容ではなく、次に展開するストーリーと時間の帯が描き込まれているのです。

~~~~~

さて、以上バロック絵画3点に共通する要素は何でしょう。

まず【次の場面につながるストーリー性を備えている】という点です。

400年も遡った昔である17世紀に、これら秀作を描いた近代バロックの画家たちは、共通して、現代ならば映画やアニメで表現されるような動きのある世界を、静止画である絵画の中に描き込もうとしていました。

つまり、映画のような動画が発明されていない時代にも関わらず、バロック時代の画家達は私たちが想像する以上に、極めて現代人の感覚に近い感性で、絵画の中に動画表現とゲーム性あるいは娯楽性あるいは多様な伝達情報を表現していたという結論になるのです。